

グローバルフェスタに参加して

大野勝弘

世間では「話し合っても無駄」「所詮どうすることもできない」という言葉を(特にネットなどで)よく見聞きします。話し合う努力や、外への興味関心をはじめから投げ出して、ひたすら自分の殻にこもるような雰囲気を、SNSなどでも感じていました。

「とにかく色んな人と知り合ってみたい！」 私が、アジア文化会館や日韓アジア基金の存在を偶然ながら知ったのは、このような気持ちに駆られてのことでした。なのでグローバルフェスタへの参加を決めたのも、単純に「外の世界に目を向けている人たちが沢山いそう！面白そう！」という非常に大ざっぱな興味を感じてのことでした。



実際に活動に参加したのは日中の一日間だけでしたので、気が付けばほとんどの時間をブースでの募金声掛けと、休み時間に他のブースをぶらつく程度で終えてしまい、帰りの途には正直後悔の気持ちが残ったのですが、それでもこの数時間の活動は、新鮮な驚きの連続でした。

まず、特設ステージには見るからに偉そうな先生方や有名アーティストが登壇し、その規模や参加者数の大きさ、そして何より「世代の若さ」に意外さを感じました。過疎地域で生まれ育った私の至極勝手なイメージとして、「社会活動もしくは政治活動などは高齢な方々が主流だろう」という印象を持っていたので、日韓アジア基金のボランティア参加者

が、ほとんど私と同年齢もしくは年下の方々が多くとても驚きました。

また他団体についても、大学を超えて活動し年複数回開発途上国に出向く学生団体と接して、若い彼らの理解の深さに、己の浅薄さが恥ずかしくなるほどでした。

また、各団体の支援対象の「きめ細かさ」もとても興味深いものでした。

例えば「ネパールの女性障がい者への支援」というボランティアブースを拝見しました。古い伝統を持つ地域では女性の地位が低いことなどは想像しやすいですが、さらに地域で女性としての役割を果たせない女性障がい者の存在を救済しようとする発想は、その現地の情勢を深く理解していないと見出せません。

カンボジアのボランティアにしても、「学校を立てる」「井戸を掘る」などの大規模な活動は聞いたことがあったのですが、日韓アジア基金の「不足教科書の支援」というニッチさに、小規模NPO団体の必要性を強く感じました。

私は、このようなボランティア活動は今回が初めてで、これからももっと広く多くの人たちとふれ合い接していきたいと思っています。今回の活動を偶然知ることができたこの縁を大事に、また日韓アジア基金の活動に参加していきたい所存です。